



てみるの時間

アートに関する新しいことを“やってみる”
参加型事業「てみるの時間」を2025年度からスタートします。

今年度はプレ事業を実施し、その一つとして10月から「ぶんかつギャラリー」を開催します。美術館の貸出ギャラリー(約188m²)を分割して参加者を公募しました。応募資格は、「徳島で今後も作品を発表する意思をお持ちの方」で、経験、年齢は不問。絵画、工芸、インスタレーションなど多彩なジャンルのアーティスト11組が集まり、作品を発表します。“やってみる”気持ちを持つ参加者たちの表現に出会いたい方はもちろん、アートを“見てみる”ことに興味のあるみなさんのご来場をお待ちしています。

このほかにも、2025年1~3月には文化の森の窓ガラスの一部を作品発表の場とする「窓ガラスプロジェクト」を予定しています。みなさんと一緒にいろいろ“やってみる”ことで、徳島から生まれる表現がさらに豊かになっていくことを目指します。



ギャラリー展示イメージ



窓ガラスプロジェクト活動イメージ

てみるの時間 2024年度プレ事業

主催:徳島県立近代美術館、徳島県立二十一世紀館

「ぶんかつギャラリー」

展示期間: 2024年10月1日[火]-10月6日[日]

開館時間: 9時30分-17時(10月6日は16時まで)

会場: 徳島県立近代美術館 ギャラリー(1階)

入場無料



「窓ガラスプロジェクト」

A:窓ガラスを表現の舞台に

文化の森の窓ガラスの一部を作品発表の場とし、プランを募集します。

・応募期間: 2024年10月-12月上旬

・発表期間: 2025年1月-3月

*応募要項・応募票は当館ウェブサイトでご確認ください。

B:みんなでおえかきワークショップ

近代美術館ロビーの大きな窓ガラスに描いてみます。

・開催日程(予定): 2025年2月22日[土]、2月23日[日・祝]

*詳しい時間や申し込み方法は12月頃ウェブサイトで公開します。

所蔵作品紹介

桂ゆき

〈さる・かに合戦〉

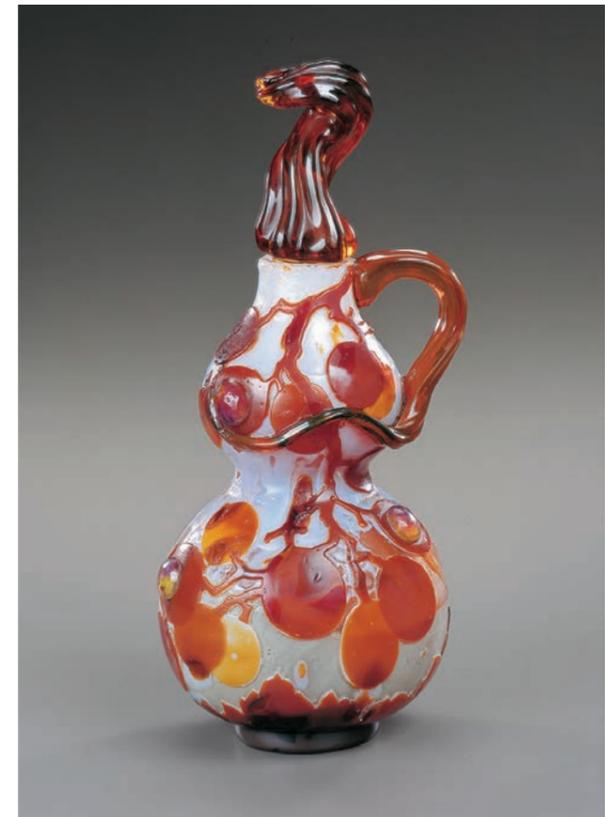
1948年 油彩 キャンバス 90.0×115.0cm



民話『猿蟹合戦』の終盤、子蟹や白、栗、蜂が総出で猿を成敗する場面が描かれています。作中の擬人化された動物や器物はいずれもどこか滑稽に描かれており、軽やかな笑いを誘います。また、画面は放射状に分節され、光の明暗による対比が際立っており、暗がりの中で大きく口を開ける白や、倒れ込むように伏せる猿の大仰な身ぶりが劇的な印象を醸し出しています。作者の桂ゆきは、戦前より主にコラージュを駆使した前衛的な作品を発表した作家です。彼女は特定の流派や様式からは距離を置きつつ、自らの表現を柔軟に変化させ、更新していくことに重きを置いていました。その本領は、細密描写やコラージュ、戯画表現を併置することで不気味さや笑い、緊張や分断といった様々な感覚を呼び覚まし、人間や社会の暗部を擲揄しながら、美術という制度そのものに抵抗し続けたことにあります。一見ユーモラスで親しみやすい表現には、画家の確かな反骨精神が込められているのです。改めて『猿蟹合戦』のあらすじに着目しましょう。猿にそそのかされ、握り飯と引き換えに柿の種を渡された蟹は、成長した柿の樹上に登った猿から次々に実を投げつけられ、深い傷を負います。これに憤った子蟹たちが報復する物語です。

桂はこの物語に、男性優位の社会の中で女性が自立するのが困難であった世相を重ね合わせていたのかもしれませんが、今まさに攻撃を受けている猿の表情さえもコミカルに描き出すこの作品において、桂はそのような鬱屈した思いを、持ち前のユーモアに転化させているのです。彼女はまた、日本の昔話や風習など、民俗的な題材に強い関心を寄せました。晩年に至り、次のように語っています。「私は寓話とか民話その他フォークロアのモチーフの絵を描くことがある。(中略)私の胸のうちに常時巣くっている『いったい人間とは何か、私とは何か』という身の程知らずな思いの前で絶望的になるときに、昏迷の霧のあい間に、ときによってチラリと、それらのフォークロアが、鮮明な色を見せたりすることがある。私の絵ではとうい霧は晴れないが、少しずつでも晴れ間の為に努力しようと絵をかくのである。」「(寓話)『一枚の繪』186号、1987年3月、49頁)本作においても、鉢巻を締めた白や、緋のような着物を身にまとい、柄杓ひしやくを手にする猿などが見えます。彼女にとってこうした民俗的なモチーフは、同時代の生活文化を身近に引き寄せ自身を内省しながら、絶えず創作へと駆り立てる源でもあったのでしょう。

(主任 三宅翔士)



〈蓋付瓶(ブドウ)〉1900-02年頃 ポーラ美術館蔵

特別展

没後120年 エミール・ガレ展

2024年10月12日[土]-12月15日[日]

文化の森千客万来事業

徳島新聞創刊80周年記念事業

自然を愛した ガラス芸術の天才

19世紀末の装飾様式「アール・ヌーヴォー」の巨匠ガレの展覧会を開催します。ガラス工芸の魅力だけでなく、ガレが命を燃やしたデザインへの情熱を感じていただける展示になっています。

エミール・ガレ(1846-1904)は、フランス北東部の都市ナンシーで、ガラス器や陶器を製造、販売していたガレ家の長男として生まれました。語学、文学、哲学、音楽、植物学など幅広い素養を身につけ、ドイツでデッサンや型のデザインも学びました。そしてデザイナーとしての修業を経て父の会社に加わり、経営を引き継ぐようになります。

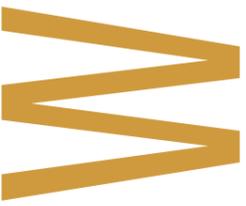
それでは、作品を取り上げながらご案内しましょう。



〈猫型置物〉1865-90年代 松江北堀美術館蔵



徳島県立
近代美術館ニュース



The Tokushima
Modern Art Museum



131 October
2024



アイデア無尽蔵

展覧会は3章構成です。最初のコーナーでは、古代ギリシャやロココなど過去の様式やジャポニスム（日本趣味）をヒントに様々な趣向を凝らした製品を紹介し、19世紀の装飾美術の流行を一望するかのようで、その自由自在な才覚に驚かされます。気鋭の工芸作家のデビューです。



《花器（ニンフ、唐草）》1880-86年頃 個人蔵

格調高い《花器（ニンフ、唐草）》は、エナメル彩色の絵付けが主流である当時の風潮に逆らった、繊細な彫刻表現が魅力的です。《猫型置物》はロングセラー商品だったとか。若々しい想像力と遊び心、絵付けの品位にも注目です。ジャポニスムの作例もたっぷり。私たち日本人にとって、もはや過去のものとも言える日本の美意識とヨーロッパの目線との融合には、興味深いものがあります。

思索するデザイン

展覧会の第2章では深化していくガレの世界に注目します。31歳で父の会社を引き継ぎ、実用品をつくる一方で、ガレは新しいガラス成形技術や、深い世界観を表現に込めた意欲作を発表し頭角を表します。1878年「エミール・ガレ」の商標でパリ万国博覧会に出品し、ガラスと陶器の部門でメダルを獲得し注目されます。1889年万博ではガラス部門グランプリ、1900年万博ではガラスと家具の部門でグランプリを得て大活躍します。《飾り棚（エリンギウム）》はジャポニスム風のシルエットに大胆な花や枝葉のデザインがあしらわれます。パネルには象嵌

細工で陽光を浴びて咲く花の情景。そして詩の一節が刻まれています。「その瞬間は我々の心の奥深くにある光であって、実に美しい」。

ガレのガラス器には詩文が入った「ものいうガラス」と呼ばれるシリーズがあり賛否両論の注目を集めます。数々の賞を受け、一層の芸術的な深化をガレが求めた背景には、当時、文学から音楽、美術まで広く流行した象徴主義の思潮がありました。人間の内面的な苦悩や夢想など目に見えないものを追求する芸術観が、ガレをとらえたのです。「悲しみの花瓶」シリーズの黒ガラスによる革新的な表現はその成果で、工芸分野における精神的な表現の可能性を開拓しました。



《飾り棚（エリンギウム）》1896-98年頃 松江北郷美術館蔵

花への愛

ガレ芸術を特徴づけるのは何といっても花でしょう。彼は熱心な園芸研究者であり、自宅の広大な庭園に各種の植物を集めました。植物のあるがままの姿を尊重するまなざしは、彼のデザインにも反映されます。展覧会の第3章はアール・ヌーヴォーの中心的作家として活躍し、孤高の境地とも言われる技の極みをご覧ください。



《花器（オダマキ）》1898-1900年 ヤマザキマザック美術館蔵
《ランプ（リンドウ）》1902-04年頃 個人蔵

《花器（オダマキ）》は器自体が花卉の姿になっており、何種類ものガラス技法を駆使して花が咲き誇る情景を描いています。《花器（プリムラ）》では、薄いレリーフ状の花柄に彫りのタッチを活かして立体感と艶めかしさを生み出します。あえて古色を加え、生まれては朽ちていく自然の深遠さを感じさせる演出は、まさにガレの真骨頂です。《花器（バラ）》はドイツとの戦争で奪われた故郷ロレーヌに咲くバラを痛ましくも健気な姿に描きます。「私たちの根源は森の奥深くにある」と彼は語りました。命に優劣を付けることなく、蛾やトンボといったはかない生命体を好んでモチーフを選び、晩年は海洋学に関心を寄せ未知の海洋生物も題材にしました。

ガレと時代

19世紀後半、歴史様式や異国趣味の折衷にとらわれていた装飾美術を改革し、新時代のデザインを求める思潮が展開しました。その変革のターニングポイントと



《花器（プリムラ）》1900年頃 個人蔵

なったのがアール・ヌーヴォーの流行です。生きとし生けるものの生命感、人間の想像力をいまいちど呼び込むことでデザインの歴史は大きく動きました。ガレはその時代とともに歩みました。

鉄やガラスなどの新素材を生かし自在な造形を試みたのもアール・ヌーヴォーの特徴です。そのためガラス作家ガレの存在は、この動向を象徴するような面も背負っているように思われます。

文学や絵画と肩を並べ、自らの思想や世界観を表明する場として作品発表に打ち込み、会社経営者として職人たちと製品開発にあけくれ、ナンシーの工芸界、園芸の分野に指導的役割を果たしたガレ。全てに正直に打ち込んだその生き方は、自然との共生を模索し、変化する時代を生きる現代の私たちに熱いエネルギーと勇気を与えてくれるのではないのでしょうか。

（課長 竹内利夫）

特別展「没後120年
エミール・ガレ展」に関する催し

スペシャルトーク
「ガレ芸術の見どころ」
10月12日[土] 14時-15時30分
講師:鈴木潔(本展監修者・美術史家)
展示室3 要観覧券

ガレ入門ツアー
10月14日[月・祝]、20日[日]、11月4日[月・振休]、
11月17日[日] 14時から約30分
進行:美術館スタッフ
展示室3 要観覧券

子ども鑑賞クラブ「ガラスの森」
11月16日[土] 14時-14時45分
進行:美術館スタッフ
対象:小学生(保護者同伴可。観覧券をお求めください)
展示室3 定員30人程度 電話で申込(先着順)当日参加も可 無料

所蔵作品展2024年度II
「時をめぐる表現」に関する催し

展示解説「時をめぐる表現」
講師:宮崎晴子(当館主任学芸員)
10月6日[日] 14時-14時45分
展示室1・2 申込不要 要観覧券

Special Exhibition
Emile Gallé



《花器（バラ）》
1901年頃
大一大美術館蔵

徳島県立近代美術館ニュース

第131号 2024年9月20日発行(10月号)

発行: 徳島県立近代美術館

770-8070 徳島市八万町向寺山

文化の森総合公園

TEL:088-668-1088 FAX:088-668-7198

美術館や展覧会についての情報は

当館ホームページをご覧ください。

<https://art.bunmori.tokushima.jp/>

